



助二郎アートワークス

筑摩十幸作品編

立ち読み版

2d Illust Collection - Sukesaburo Artworks feat. Jukou Tikuma

Shirayuri no Kenshi vs Kurobara no Kishi Works

3-76

Kurobara no Kishi Works

77-136

Shirayuri no Kenshi Works

137-206

Kurenai no Touzokuhime Leia Works

207-242

Vampire Slave Works

243-294

これまでキルタイムで描かれてきた助三郎先生の
作品をまとめたデジタルイラスト集！
筑摩十幸先生の小説挿絵で描かれたイラストを中心に、
これまでのピンナップ画像なども含めた
大ボリュームの構成になっています！
また、本編は印刷も可能！（PDFファイルで提供の場合のみ）
お好きなシーンを手元において楽しめます！
本編では、このテキストは掲載されていません。







若い男が私に覆い被さり、ズブリと太くて硬い肉棒を突き刺しました。腰を激しく打ちつけ、あそこを無茶苦茶にかき回します。でもまだ足りないのです。朦朧とした意識に蘇るのは、奴隷に墮とされた城内での凄まじい陵辱劇です。

ドロドロに溶けていく意識の中、バスクは私にそっと囁きます。

「お前は、もう一人や二人じゃ満足できない身体になっていたのさ。もっともっと調教してやるぜ。ポロポロになるまで犯されなければ満たされない、輪姦願望の変態女にな」

その言葉に恐怖する間もなく、肉槍が次々に私を貫きました。お尻も灼熱の棒でいっぱい満たされていきます。唇も喉深くまで挿

られました。その気持ちよさに私は我を忘れて叫んでしまいました。

「もっと犯して……私、輪姦されたいのっ！ ああああっ！ イ、イクウウウツツ！」

強烈な絶頂に追い込まれながら、バスクの言う通りの女になっていくのを実感し、私はゾクツと背中を震わせました。きつと私は『輪姦願望の変態女』に調教されてしまうでしょう。でも、もうそうなっても構わない、むしろそうなりたいと思いました。そして数えきれない絶頂とともに、私の意識は白濁の底なし沼に沈められていくのでした。



「ハアハア、この調子なら一発で妊娠しちゃうかもしれないな」

「もしかして聖帝様を孕ませたら、皇帝になれるのか」

(そ、そんな……皇帝である私が……こんな誰とも知れない男の子供を身籠るなど……)

まさに聖帝としての存在をどん底まで貶める最悪の事態だった。だが口から出るのは心とは真逆の言葉だ。

「はあぁーん、種つけして……ああああっ……聖帝のオマンコにい……赤ちゃんンッ、孕ませてえ」

腰がクネクネとうねり舞い、男根を根本までくわえ込もうとする。完熟の蜜肉の締めつけは世界中のどんな男でも虜にするだろう。

「ハアハアッ……おおっ。すごい締めつけだぜ……食いちぎられそうだった！」

極上の柔肉に包まれ男根がいなく。魂まで吸い取られそうな収斂が射精中枢を直撃した。

「くおおおっ！ 出してやる！ 聖帝の子宮に、俺様の仔種を注ぎ込んでやるっ！」

ドピユウウウッ！ ビュルルルッ！
ドクドクドクンッ！

「ああおおっ！ ああ、熱いの出されて……ンアアッ！ イクッ、イクウウッ！」

男の精液が凄まじい勢いで子宮の中に撃ち込まれてくる。

「ああ————ッッ!!」



「よしよし、こっちは中出しでイかせてやる。
うおらあっ！」

バスクは王女の恥骨の裏にある急所をゴリ
ゴリと研磨したあと、蜜壺の最奥にまで突き
入れ、情欲のマグマを噴出させた。

「バスク様あ……ああああ……」
「っ！」

「ひいああっ！ そんな……中に……うああ
あああっ！」

ブリジットと同時にローザも牝声を迸らせ
る。枷鎖を通じて伝わってきた膣内射精の
生々しい灼熱感が女の官能中枢を暴走させ
る。

「イケッ、アナル牝！ ザーメン浣腸ダ！」
息を合わせるようにアルガウが肉棒をいき

なり引っっこ抜き、肛門に龟头先端を浅く押し
込んだ。そのまままるで生きた浣腸器となっ
て大量ザーメンをアナルに注ぎ込む。

ブシュッ！ ビュルルッ！ ドプドプドプ
ウッ！

「ヒィ——ッ！」

膣内射精の感覚を味わわれながら、灼熱
のザーメンを浣腸されて、屈辱と悦楽、牝楽
と肛悦の混ざり合った美貌が反り返る。収縮
する括約筋が見えないバスクの男根と、アル
ガウの龟头とを同時に食い締めた。

「イクッ！ ああああ！ イクウ……ッ！
ッ！ ああああ……ッ！」







ブリジット
六本基本衣装
ラフ草



ローザ
幼女装
修正版



ピルリル
ラフ



姫
ラフ草



ローザ
赤外
衣装
ラフ草

濃厚に絡みつく白濁粘液をローザは喉を鳴らして飲み干していく。喉を灼く熱さ、脳を焙る生臭さ、それらすべてが心地よい。

「たまらん、でるぞ！」二人とも受け取れ！」妖艶な色香に巻き込まれ、包囲していた男たちも射精を開始する。

搾りたての熱い精が金と銀のブロンドを穢し、肌に墮落の刻印を押しつける。その汚辱感が今の自分には相応しく感じられ、もつと汚されたいという気持ちちがこみ上げる。

「ああ！ もつと、もつとかけて！ あふうん！ 変態のローザに……はあはあ……おちポ汁……もつとくださいい！」

狂ったように恥声を振りまく奴隷聖帝に、シャワーのように精が浴びせられた。視界が

白く霞み、呼吸するたび精液の匂いを肺腑に染み込まされる。

「アアア、アハアアアンツ！ よく言えましたあ！ 聖帝様あ！ ンアアアア！」

自らも枷の刺激に酔いしれながら、ブリジットが思い切り腰をスイングさせる。勢いで最後の枷の先端部分がぢゅぽんと抜け出した。

「ンああああ——ツ！」

赤い稲妻が脊椎を灼きながら駆け上がり、脳底に突き刺さる。脳細胞が沸騰し、意識は蒸発した。散り散りになった自我が、七色に煌めく官能の頂上に打ち上げられた。



「フフフ。私の娘らしくなってきたな。まずはミルクを飲ませてやろう」

傲慢に振り返った勃起の中を、激しく血流が駆け巡る。両手に花の昂奮が官能中枢を暴発寸前に煮えたぎらせ、射精快感への期待に海綿体が膨れ上がっていく。しかもかつて自分に刃向かった女たちが、従順にひざまずき献身的な奉仕をしているのだから最高の気分である。

「お父様、飲ませてえ。あああん、ブリジツトのお口にたくさん注ぎ込んでえ」

ブリジツトが思い切りおねだりしながらローザと乳房を摺り合わせた。ギュッと圧縮された十字の中心で、勃起がビクビクッと痙攣する。

「おおっ。締まる！」

強烈な乳肉の締めつけが、あたかも二人の膣肉を同時に犯しているような快感を与え、アルベルトのボルテージは最高潮に達した。

「ンああっ。飲ませてくうさい……はああ……お父……様の……ミルク……ローザにっばい飲ませてくださいい」

姫奴隷の昂奮にシンクロしてしまったように、ローザが叫んだ直後――。

ブシャアアアアアッ！ ドビユドビユドビユウウッ！

男根がポンプのように拍動し、灼熱の淫濁液を大量にぶちまける。



「それぞれそれえっ！ 子種を注ぎ込んでやる！ 孕ませてやるぞお！」

手綱のように鎖をグイッと引き絞る。引き寄せた聖域に向かってカウンターの一突きが深々と打ち込まれた。

ブッシヤアアアアアアアッ！ ドプドプドプウツ!! ビュル、ビュルルウツ！

「あきやああああ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

ズドンツと頭蓋骨に響くほど、重量級の白濁塊が二つの子宮を完全に串刺しにする。

「ヒィヒィッ！ あちゅいいいいっ！ イクッ！ イつちやううのおっ！」

ローザもブリジットも喉を反らせ、白目を剥く。エクスタシーの波が突き抜け、金髪と

銀髪が並んで突風を受けたように大きくたなびいた。

「こつちもいくぜ！」お顔にぶっかけてやるぞお！」「一滴残さず全部飲むんだぜ！」

ドピュドピュドピュッ！ ビュルルルルルウツ！

それにつられて家臣たちも一斉に精を放つ。喉奥に肛門に、そして乳房やクリトリスにもドロドロの邪精液がぶちまけられた。

「あ、ああああ……ミリュク……ミリュクウ……いっばいいい！」







「ふうん……ううん」と鼻を鳴らしてペニスを吸いしゃぶり、やがて口の中に吐き出された精液をゴクゴクと喉を鳴らして飲み干した。

「あふ……もつとミルク……ください……もつと……オマ○コ挟って……お尻も……もつと深く……奥までしてっ……ああっ！ イクっ、またイクう!!」

男心をとろかす甘い声。娼婦そのものの媚態。そこには気品溢れる第一王女の姿は微塵もなかった。目の前の男根のことしか考えられな。剣のことも国のことも、完全に頭から消えていた。牝蜜も腸液も垂れ流しになり、自らの恥水溜まりの中で腰を泳がせる。それからどれだけ犯され白濁を浴びせられ

ただろうか。数え切れない絶頂を味わわされ、ブリジットはいまや酩酊状態だった。

唇もアヌスもたつぷりと精液を注ぎ込まれ、その一方でバスクのモノは一度も果てることなく、勃起したまま奴隷姫の美肉を貫いている。

(ああ……お腹が……あそこが……)

焼けつくような下腹の疼きに誘われて、腰がより深く結合し子宮口が亀頭にピタリと押し当てられる。そのまま焦れつつそうにユルユルと腰をうねらせた。

「ふふふ、物欲しそうな顔ね」

妹の様子を敏感に察知してレイラが囁きかける。その手は湯気を立てんばかりに充血した結合部に伸びる。



ドババツ！ ドブドブドブドブツ！

二人分の体液を受けて、肉体が一気に高みに押し上げられた。身体を裂くような前後二ヶ所の官能の稲妻が、女の中心、六本責めを受けている子宮に落雷した。

「ンひゃあああああッ！ ひッ！ イクイクイクウツ！ イっひゃうううううううううう!!!」

全身を包む快感がギュウツと一点に収束し、次の瞬間白熱した解放感が子宮の中で爆発した。巨大な火柱が尿道口を貫き、溜まりに溜まった淫気がついに決壊する！

「ひいひいひいひいああああッ!! でちやううッ!! レちやううううううううううッ!!!」

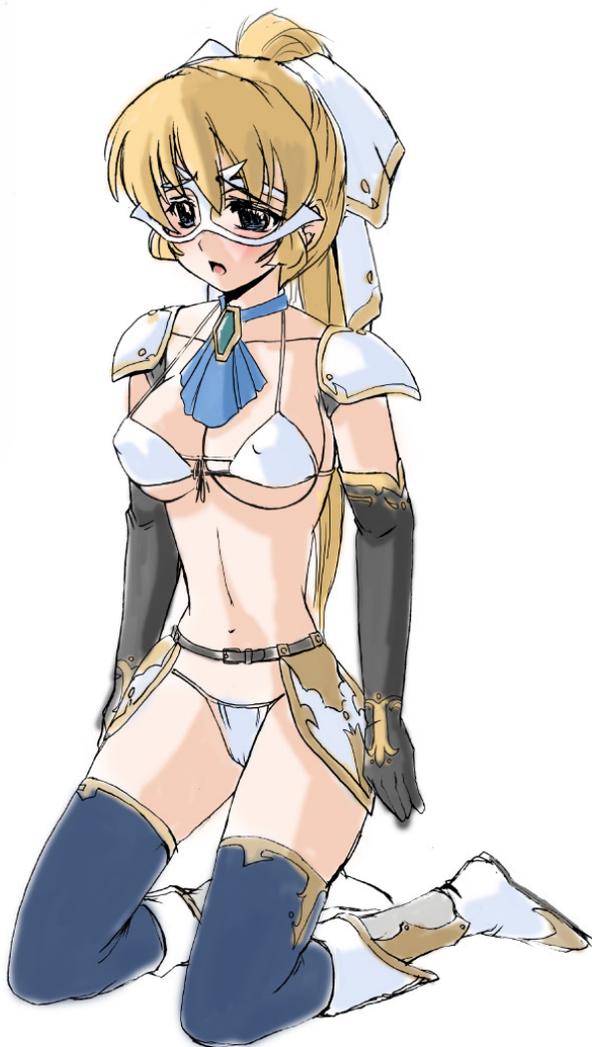
プシヤアアアアアアアアッ!! ブジュルルルウウウウウウウウッ!!!

仰け反り跳ねまくる結合部から大量の女の精がドツと噴き迸った。総身を揉み絞り、ブルンドを振り乱す。身体がバラバラになりそんな快樂の波に、白い歯を噛んで全身の筋肉を突っ張らせた。女の絶頂に加え射精の快感まで感じながら、恍惚の痙攣が何度も奴隷少女の身体を駆け抜けていく。もう頭の中が真っ白だった。激しすぎる絶頂で思考が完全に停止してしまっていた。

ビュルツ！ ビュルルルウツ！ ドピユウウウウウウウツ!!

放心した姫に次々と精が迸る。喉の奥に、媚肉の襞に、排泄器官の奥に白濁が注ぎ込まれる。鼻や耳の穴にまで精液が流し込まれてしまう。





花嫁
花嫁
花嫁



花嫁
花嫁
花嫁





「いやっ、いやあああああつ！ ヒイイインッ!!」

鋭い痛みと同時に、何かが身体の中でブチンツと裂ける。女として最も大切な、愛する人に捧げるべき貞操が、踏みにじられた瞬間であった。

(ジェフティ……さまあ……)

激痛とそれ以上の精神的なダメージに、これまで堪えてきた涙の滴がついに目尻からこぼれ落ちた。

「カッカッカッ！ 痛いか、悔しいか、悲しいか？ 一生に一度の痛み、よおく覚えておけいっ」

亀頭まで沈めた陰茎をさらに奥まで捻るようにして埋め込んでいく。

「ううぐうあああ……あああ~~~~~ッ」
無数のイボが裂けた処女膜を擦り上げ、さらなる痛みと屈辱をレイアに刻み込む。

「ウフウフ。シヨウグン様の太いイボイボのオチ■チンが、どンドン中に入っていくわよ。いい気味ね、オホホホッ」

「あ、ああうっ！ いた……つくうんっ！ やめ……ああああつ！ いたいっ……うっくうんっ！」

身体を真つ二つに裂かれるような衝撃に息もつけず、レイアは苦しげに喉を引き攣らせ、こめかみに苦悶の汗を滲ませる。だがブルゴックはそれに構わず、岩のような腰を打ちつけて粘膜の層をこじ開け、巨根を強引に押し進めた。



ベッドに仰向けになった歌織の身体に、魔人たちが群がっていた。

群がった魔人たちは、歌織の魔気を求めて全身を隈なく舐め回している。

「巫女様……魔気をもっと……」

大きく開かれた魔人の口から、ダラリと蛇のように長い舌が這い出てくる。まるで別の生き物のようによく動き、たっぷりの唾液をクレヴァスに塗りつけてくる。

「んん……あふうんっ……いいよ……もっともっと……舐めなさいよ」

歌織は上気した顔をうっとり反らせ、クンニ奉仕している男の頭を両手でキュツと押しつけた。

たおやかな首筋や太腿、乳房にもいくつも

の唇と舌が押し当てられていた。さらには尖り耳もくわえられ、しゃぶられる。ブーツのつま先までも舐められている。歌織の全身から滲み出る魔素を含んだ汗を、丁寧に舐め取っていく。

「巫女様……」

「歌織様……お、俺……もう、我慢が……」

クンニしていた男が情けない声を上げた。股間ではビンビンに勃起した男根が、先走りながらダラダラ流れ流している。

「この中ではあなたが一番元気がよさそうね」

浅黒い肌の男を招き寄せ、歌織は股間をまさぐり始める。その手つきはまるで娼婦のようになやかで、男の勃起をさらに硬く充血させていく。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>